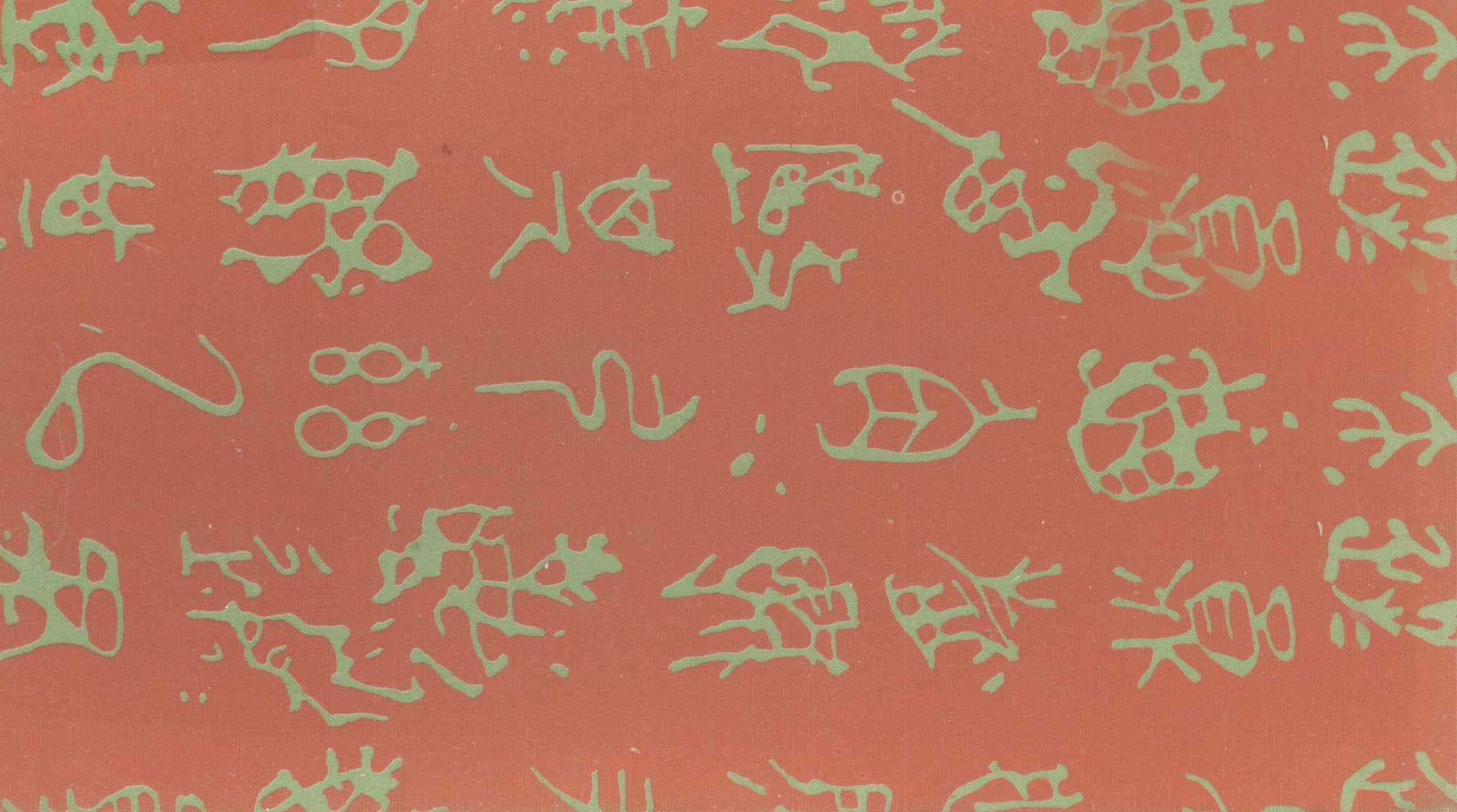


漱石全集
第八巻

それから

全三十五巻　第八回配本

漱石全集　第八巻
定價　八五〇圓

一九五六年七月二七日　第一刷發行
一九七九年三月　五　日　第七刷發行

著者　夏目漱石（なつめそうせき）
東京都千代田區一ツ橋二―五―五

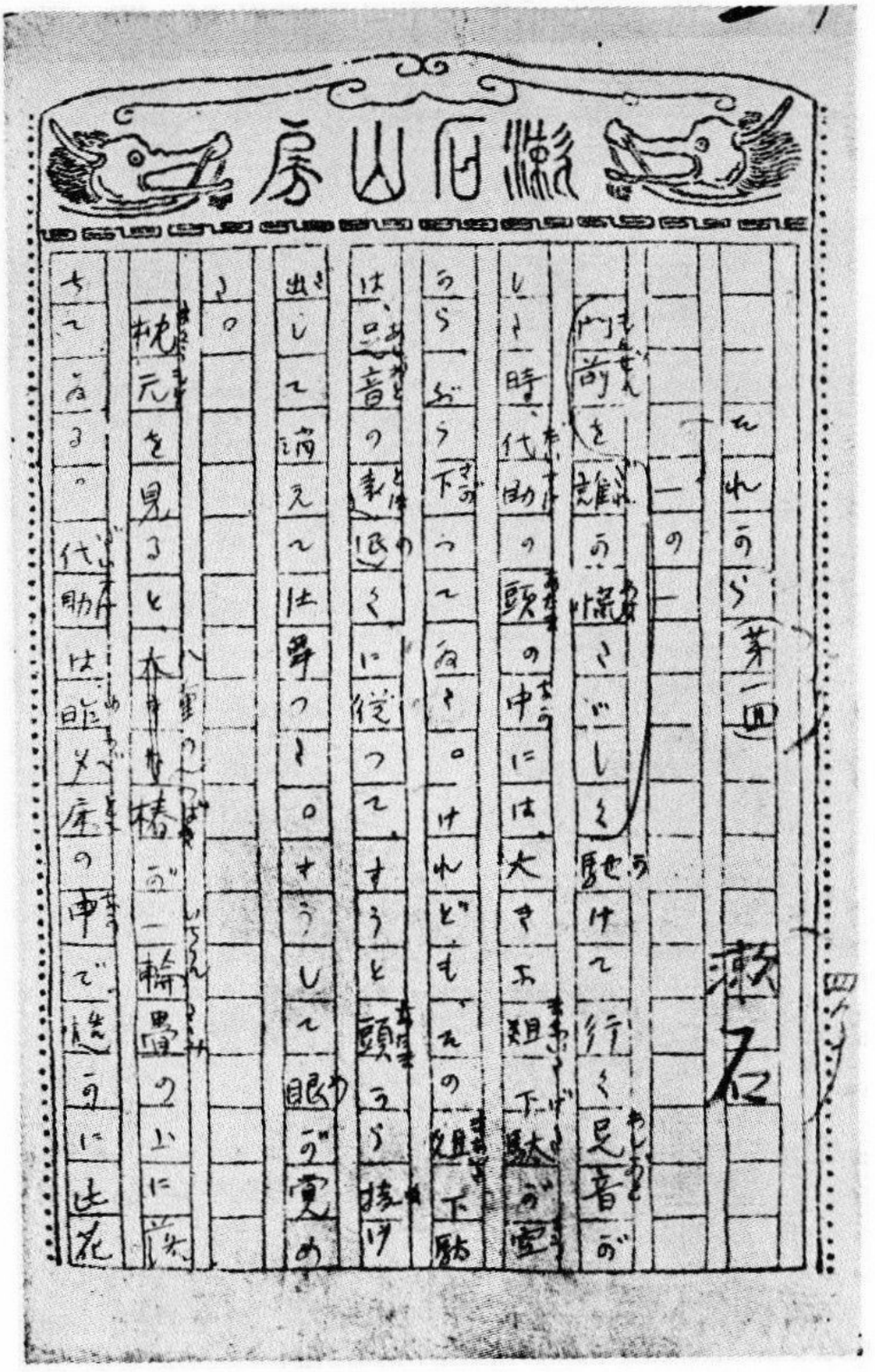
發行者　綠川亨
東京都青梅市根ケ布一―三八五

印刷者　青木勇

發行所　東京都千代田區一ツ橋二―五―五　株式會社　岩波書店
電話〇三―二六五―四一一一　振替東京六―二六二四〇

印刷・精興社　製本・青木製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします



「それから」原稿の冒頭

目次

それから　三
解説　二五五
注解　二六七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それから

明治四二、六、二七―四二、一〇、一四

一

誰か慌たゞしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の頭の中には、大きな組下駄が空から、ぶら下つてゐた。けれども、その組下駄は、足音の遠退くに從つて、すうと頭から拔け出して消えて仕舞つた。さうして眼が覺めた。

枕元を見ると、八重の椿が一輪疊の上に落ちてゐる。代助は昨夕床の中で慥かに此花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謨毬を天井裏から投げ付けた程に響いた。夜が更けて、四隣が靜かな所爲かとも思つたが、念のため、右の手を心臟の上に載せて、肋のはづれに正しく中る血の音を確かめながら眠に就いた。

ぼんやりして、少時、赤ん坊の頭程もある大きな花の色を見詰めてゐた彼は、急に思ひ出した樣に、寐ながら胸の上に手を當てゝ、又心臟の鼓動を檢し始めた。寐ながら胸の脈を聽いて見るのは彼の近來の癖になつてゐる。動悸は相變らず落ち付いて確に打つてゐた。彼は胸に手を當てた儘、此鼓動の下に、温かい紅の血潮の緩く流れる樣を想像して見た。是が命であると考へた。自分は今流れる命を掌で抑へてゐるんだと考へた。それから、此掌に應へる、時計の針に似た響は、自分を死に誘ふ警鐘の樣なものであると考へた。此警鐘を聞くことなしに生きてゐられたなら、——血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかつたなら、如何に自分は氣樂だらう。如何に自分は絶對に生を味はひ得るだらう。けれども——代助は覺えず悚とした。彼は血潮によつて打たるゝ掛念のない、靜かな心臟を想像するに堪へぬ程に、生きたがる男である。彼は時々寐

ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、此所を鐵槌で一つ撲されたならと思ふ事がある。彼は健全に生きてゐながら、此生きてゐるといふ大丈夫な事實を、殆んど奇蹟の如き僥倖とのみ自覺し出す事さへある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中から兩手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬つてゐる繪があつた。彼はすぐ外の頁へ眼を移した。其所には學校騒動が大きな活字で出てゐる。代助は、しばらく、それを讀んでゐたが、やがて、惓怠さうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落した。夫から烟草を一本吹かしながら、五寸許り布團を摺り出して、疊の上の椿を取つて、引つ繰り返して、鼻の先へ持つて來た。口と口髭と鼻の大部分が全く隱れた。烟りは椿の瓣と蕊に絡まつて漂ふ程濃く出た。それを白い敷布の上に置くと、立ち上がつて風呂場へ行つた。

其所で叮嚀に齒を磨いた。彼は齒並の好いのを常に嬉しく思つてゐる。肌を脱いで綺麗に胸と脊を摩擦した。彼の皮膚には濃かな一種の光澤がある。香油を塗り込んだあとを、よく拭き取つた樣に、肩を搖かしたり、腕を上げたりする度に、局所の脂肪が薄く漲つて見える。かれは夫にも滿足である。次に黑い髮を分けた。油を塗けないでも面白い程自由になる。髭も髮同樣に細く且初々しく、口の上を品よく蔽ふてゐる。代助は其ふつくらした頰を、兩手で兩三度撫でながら、鏡の前にわが顏を映してゐた。丸で女が御白粉を付ける時の手付と一般であつた。實際彼は必要があれば、御白粉さへ付けかねぬ程に、肉體に誇を置く人である。彼の尤も嫌ふのは羅漢の樣な骨骼と相好で、鏡に向ふたんびに、あんな顏に生れなくつて、まあ可かつたと思ふ位である。其代り人から御洒落と云はれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は舊時代の日本を乘り

超えてゐる。

約三十分の後彼は食卓に就いた。熱い紅茶を啜りながら燒麵麭に牛酪を付けてゐると、門野と云ふ書生が座敷から新聞を疊んで持つて來た。四つ折りにしたのを座布團の傍へ置きながら、

「先生、大變な事が始まりましたな」と仰山な聲で話しかけた。此書生は代助を捕まへては、先生先生と敬語を使ふ。代助も、はじめ一二度は苦笑して抗議を申し込んだが、えへゝゝ、だつて先生と、すぐ先生にして仕舞ふので、已を得ず其儘にして置いたのが、いつか習慣になつて、今では、此男に限つて、平氣に先生として通してゐる。實際書生が代助の樣な主人を呼ぶには、先生以外に別段適當な名稱がないと云ふことを、書生を置いて見て、代助も始めて悟つたのである。

「學校騷動の事ぢやないか」と代助は落付いた顏をして麵麭を食つて居た。

「だつて痛快ぢやありませんか」

「校長排斥がですか」

「えゝ、到底辭職もんでせう」と嬉しがつてゐる。

「校長が辭職でもすれば、君は何か儲かる事でもあるんですか」

「冗談云つちや不可ません。さう損得づくで、痛快がられやしません」

代助は矢つ張り麵麭を食つてゐた。

「君、あれは本當に校長が惡らしくつて排斥するのか、他に損得問題があつて排斥するのか知つてますか」と云ひながら鐵瓶の湯を紅茶々碗の中へ注した。

「知りませんな。何ですか、先生は御存じなんですか」

「僕も知らないさ。知らないけれども、今の人間が、得にならないと思つて、あんな騷動をやるもんかね。ありや方便だよ、君」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「へえ、左様なもんですかな」と門野は稍眞面目な顏をした。代助はそれぎり默つて仕舞つた。門野は是より以上通じない男である。是より以上は、いくら行つても、へえ左様なもんですかなで押し通して澄ましてゐる。此方の云ふことが應へるのだか、應へないのだか丸で要領を得ない。代助は、其所が漠然として、刺激が要らなくつて好いと思つて書生に使つてゐるのである。其代り、學校へも行かず、勉强もせず、一日ごろ〳〵してゐる。君、ちつと、外國語でも研究しちやどうだなどゝ云ふ事がある。すると門野は何時でも、左様でせうか、とか、左様なもんでせうか、とか答へる丈である。決して爲ませうといふ事は口にしない。又かう、怠惰ものでは、さう判然した答が出來ないのである。代助の方でも、門野を教育しに生れて來た譯でもないから、好加減にして放つて置く。幸ひ頭と違つて、身體の方は善く動くので、代助はそこを大いに重寶がつてゐる。代助ばかりではない、從來からゐる婆さんも門野の御蔭で此頃は大變助かる樣になつた。その原因で婆さんと門野とは頗る仲が好い。主人の留守などには、よく二人で話をする。

「先生は一體何を爲る氣なんだらうね。小母さん」

「あの位になつて入らつしやれば、何でも出來ますよ。心配するがものはない」

「心配はせんがね。何か爲たら好ささうなもんだと思ふんだが」

「まあ奥樣でも御貰ひになつてから、緩つくり、御役でも御探しなさる御積りなんでせうよ」

「いゝ積だなあ。僕も、あんな風に一日本を讀んだり、音樂を聞きに行つたりして暮して居たいな」

「御前さんが？」

「本は讀まんでも好いがね。あゝ云ふ具合に遊んで居たいね」

「夫はみんな、前世からの約束だから仕方がない」
「左様なものかな」
まづ斯う云ふ調子である。門野が代助の所へ引き移る二週間前には、此若い獨身の主人と、此食客との間に下の様な會話があつた。
「君は何方の學校へ行つてるんですか」
「もとは行きましたがな。今は廢めちまいました」
「もと、何處へ行つたんです」
「何處つて方々行きました。然しどうも厭きつぽいもんだから」
「ぢき厭になるんですか」
「まあ、左様ですな」
「で、大して勉强する考へもないんですか」
「えゝ、一寸有りませんな。それに近頃家の都合が、あんまり好くないもんですから」
「家の婆さんは、あなたの御母さんを知つてるんだつてね」
「えゝ、もと、直近所に居たもんですから」
「御母さんは矢つ張り……」
「矢つ張りつまらない內職をしてゐるんですが、どうも近頃は不景氣で、餘まり好くない様です」
「好くない様ですつて、君、一所に居るんぢやないですか」
「一所に居ることは居ますが、つい面倒だから聞いた事もありません。何でも能くこぼしてる様です」
「兄さんは」
「兄は郵便局の方へ出てゐます」
「家は夫丈ですか」
「まだ弟がゐます。是は銀行の——まあ小使に少し毛の生えた位な所なんでせう」
「すると遊んでるのは、君許りぢやないか」
「まあ、左様なもんですな」

「それで、家にゐるときは、何をしてゐるんです」
「まあ、大抵寐てゐますな。でなければ散歩でも爲ますかな」
「外のものが、みんな稼いでるのに、君許り寐てゐるのは苦痛ぢやないですか」
「いえ、左様でもありませんな」
「家庭が餘っ程圓滿なんですか」
「別段喧嘩もしませんがな。妙なもんで」
「だって、御母さんや兄さんから云ったら、一日も早く君に獨立して貰ひたいでせうがね」
「左様かも知れませんな」
「君は餘っ程氣樂な性分と見える。それが本當の所なんですか」
「えゝ、別に嘘を吐く料簡もありませんな」
「ぢや全くの呑氣屋なんだね」
「えゝ、まあ呑氣屋って云ふもんでせうか」
「兄さんは何歳になるんです」
「斯うつと、取って六になりますか」
「すると、もう細君でも貰はなくちゃならないでせう。兄さんの細君が出來ても、矢っ張り今の様にしてゐる積ですか」
「其時に爲って見なくっちゃ、自分でも見當が付きませんが、何しろ、どうか爲るだらうと思ってます」
「其外に親類はないんですか」
「叔母が一人ありますがな。こいつは今、濱で運漕業をやってます」
「叔母さんが？」
「叔母が遺ってる譯でもないんでせうが、まあ叔父ですな」
「其所へでも賴んで使って貰っちゃ、どうです。運漕業なら大分人が要るでせう」
「根が怠惰もんですからな。大方斷わるだらうと思

つてるんです」

「さう自任してゐちや困る。實は君の御母さんが、家の婆さんに頼んで、君を僕の宅へ置いて呉れまいかといふ相談があるんですよ」

「えゝ、何だかそんな事を云つてました」

「君自身は、一體どう云ふ氣なんです」

「えゝ、成るべく怠けない樣にして……」

「家へ來る方が好いんですか」

「まあ、左樣ですな」

「然し寐て散歩する丈ぢや困る」

「そりや大丈夫です。身體の方は達者ですから。風呂でも何でも汲みます」

「風呂は水道があるから汲まないでも可い」

「ぢや、掃除でもしませう」

門野は斯う云ふ條件で代助の書生になつたのである。代助はやがて食事を濟まして、烟草を吹かし出した。今迄茶簞笥の陰に、ぽつねんと膝を抱へて柱に倚り懸つてゐた門野は、もう好い時分だと思つて、又主人に質問を掛けた。

「先生、今朝は心臓の具合はどうですか」

此間から代助の癖を知つてゐるので、幾分か茶化した調子である。

「今日はまだ大丈夫だ」

「何だか明日にも危しくなりさうですな。どうも先生見た樣に身體を氣にしちや、——仕舞には本當の病氣に取つ付かれるかも知れませんよ」

「もう病氣ですよ」

門野は只へえゝと云つた限、代助の光澤の好い顏色や肉の豐かな肩のあたりを羽織の上から眺めてゐる。代助はこんな場合になると何時でも此青年を氣の毒に思ふ。代助から見ると、此青年の頭は、牛の腦味噌で一杯詰まつてゐるとしか考へられないのである。話を

すると、平民の通る大通りを半町位しか付いて來ない。たまに横町へでも曲ると、すぐ迷兒になつて仕舞ふ。論理の地盤を堅に切り下げた坑道などへは、てんから足も踏み込めない。彼の神經系に至つては猶更粗末である。恰も荒繩で組み立てられたるかの感が起る。代助は此青年の生活狀態を觀察して、彼は必竟何の爲に呼吸を敢てして存在するかを怪しむ事さへある。それでゐて彼は平氣にのらくらしてゐる。しかも此のらくらを以て、暗に自分の態度と同一型に屬するものと心得て、中々得意に振舞ひたがる。其上頑强一點張りの肉體を笠に着て、却つて主人の神經的な局所へ肉薄して來る。自分の神經は、自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感應性に對して拂ふ租稅である。高尙な教育の彼岸に起る反響の苦痛である。*天爵的に貴族となつた報に受ける*不文の刑罰である。是等の犧牲に甘んずればこそ、自分は今の自分に爲れた。否、ある時は是等の犧牲そのものに、人生の意義をまともに認める場合さへある。門野にはそんな事は丸で分らない。

「門野さん、郵便は來て居なかつたかね」

「郵便ですか。斯うつと。來てゐました。端書と封書が。机の上に置きました。持つて來ますか」

「いや、僕が彼方へ行つても可い」

齒切れのわるい返事なので、門野はもう立つて仕舞つた。さうして端書と郵便を持つて來た。端書は、今日二時東京着、たゞちに表面へ投宿、取敢へず御報、明日午前會ひたし、と薄墨の走り書の簡單極るもので、表に*表神保町の宿屋の名と平岡常次郎といふ差出人の姓名が、裏と同じ亂暴さ加減で書いてある。

「もう來たのか、昨日着いたんだな」と獨り言の樣に云ひながら、封書の方を取り上げると、是は親爺の手蹟である。二三日前歸つて來た。急ぐ用事でもないが、色々話しがあるから、此手紙が着いたら來てくれ

ろと書いて、あとには京都の花がまだ早かつたの、急行列車が一杯で窮屈だつた抔といふ閑文字が數行列ねてある。代助は封書を卷きながら、妙な顏をして、兩方見較べてゐた。

「君、電話を掛けて呉れませんか。家へ」

「はあ、御宅へ。何て掛けます」

「今日は約束があつて、待ち合せる人があるから上がれないつて。明日か明後日屹度伺ひますからつて」

「はあ。何方に」

「親爺が旅行から歸つて來て、話があるから一寸來いつて云ふんだが、——何親爺を呼び出さないでも可いから、誰にでも左樣云つて呉れ給へ」

「はあ」

門野は無雜作に出て行つた。代助は茶の間から、座敷を通つて書齋へ歸つた。見ると、奇麗に掃除が出來てゐる。落椿も何所かへ掃き出されて仕舞つた。代助は花瓶の右手にある組み重ねの書棚の前へ行つて、上に載せた重い寫眞帖を取り上げて、立ちながら、金の留金を外して、一枚二枚と繰り始めたが、中頃迄來てぴたりと手を留めた。其所には廿歳位の女の半身がある。代助は眼を俯せて凝と女の顏を見詰めてゐた。

二

着物でも着換へて、此方から平岡の宿を訪ね樣かと思つてゐる所へ、折よく先方から遣つて來た。車をがら〳〵と門前迄乘り付けて、此所だ〳〵と梶棒を下さした聲は慥かに三年前分れた時そつくりである。玄關で、取次の婆さんを捕まへて、宿へ蟇口を忘れて來たから、一寸二十錢貸してくれと云つた所などは、どうしても學校時代の平岡を思ひ出さずにはゐられない。代助は玄關迄馳け出して行つて、手を執らぬ許りに舊友を座敷へ上げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com